保育士と小学校教職員による就学期の児童の姿に関する認識
── 児童の基本的生活習慣について ──

田中　浩二・馬場　康宏

Ⅰ　はじめに

2008年に保育所保育指針（以下、保育指針）が改定され、第四章（保育の計画及び評価）の三（指導計画の作成上、特に留意すべき事項）のエにおいて、小学校との連携についての事項が示されており、そこでは、次のように記されている。「（ア）子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること。」とある[1)]。さらに、「（イ）子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること。」とされている。

（ア）については保育所と小学校の連携を図ること、（イ）についてはいわゆる保育所児童保育要録（以下、保育要録）の送付に関する内容であり、2008年の改定によって新たに加えられた事項であり、これらの事項に基づいて、全国の保育所では保育要録を作成し、小学校へ送付することを含めて、保育所と小学校とのより積極的な連携を図っていく様々な取組みが展開されている。保育所と小学校の連携の必要性が言われるようになったのは、2008年の保育指針改定よりも以前のことであり、1990年代後半より小一プロブレムが社会問題になったことなどが契機に挙げられている。その中で、子どもの学びや育ちの連続性の必要性が認識され、保育所や幼稚園と小学校が互いに連携を取り合いながら、保育所や幼稚園から小学校へと子どもの生活の場が移行していく際の段差を解消していくことを目的とした取組みが進められてきた。今後の就学期前の保育においても、就学期の子どものスムーズな生活の場の移行や、そのための保育所と小学校の連携がより一層求められると考えられる。

さて、就学期という子どもの生活の場が保育所から小学校へと移行する時期において、子どもの育ちの連続性を確保あるいは保障していこうとした場合、いくつかの視点あるいは実践が考えられる。原子は、就学前における質の高い保育と教育の充実と、小学校への円滑な移行、という２つの視点を取り上げ、そのために保育所や幼稚園の職員同士の交流や保育所と幼稚園の一元化、保育所と幼稚園と小学校の三者間の連携・交流、そして子どもたちが小学校を楽しく感じる機会の提供などが必要であると提案している[2)]。また、腰山は幼稚園や保育所における幼児教育と小学校低学年段階の児童の教育を、幼年期教育という範疇で捉えなおすことによって発達の近似性や連続性に自然な形で即応でき、そのことにより幼稚園と保育所、小学校の連携意識の共通化と相互協力も密接になると言及している[3)]。このように接続期の連続性を重視した取組みとして、保育所や小学校の双方が互いの状態に歩み寄りながら、徐々に子どもの生活の場を移行しようとする接続カリキュラムやアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムといった実践も数多く行われおり、保小連携の主要な手段の一つとなっている[4)、5)]。

保小連携では上述した例のような、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラム、また保育所と小学校での交流や協働の機会などが効果的な連携を展開してくための手段として扱われることが多い一方で、就学期前後に児童と関わる保育士や小学校教職員の連携や児童の実態に対する意識・認識が議論されることは少ない。実際に、田中らの研究では、保小連携や児童の生活の場の移行に際し、保育要録の有益性を示唆すると同時に、連携を図るためには保育士と小学校教職員の間で意識や認識の共通理解を涵養していくことが重要であると述べている[6)]。

そこで、本研究では、保育所と小学校のより効果的な連携を図るための基盤と考えられる保育士と小学校教職員の就学期児童の姿に対する意識や認識を明らかにすることを目的とした。なお、就学期児童の姿については多岐に渡るため、生活の基本となる基本的生活習慣、いわゆる保育指針の５領域の「健康」に関連する側面に焦点をあてて分析した。

Ⅱ　方　法

ⅰ　調査目的

本調査は、「就学期の児童の姿に関する調査」として、保育所職員（以下、保育士）と小学校教職員（以下、小学校教職員）のそれぞれが、就学期における児童の姿について、どのように認識しているかを明らかにすることを目的として実施した。

ⅱ　調査対象

調査対象は、Ｓ市の公私立保育所に所属する保育士すべて、および同Ｓ市の小学校に所属し、過去３年以内に１年生を担当した教職員と教務主任とした。

ⅲ　調査方法・調査時期

調査方法については、保育士、小学校教職員ともに、質問紙を配布し、自記式により記入してもらった。

調査時期として、保育士は平成26年３月に、小学校教職員は平成26年５月に実施した。このように年度をまたいで調査を実施することで、保育士と小学校教職員が同一の児童を評価できるようにした。

ⅳ　調査項目

調査項目は、基本情報として回答者の年齢や経験年数を質問した。さらに、児童の姿に関する項目として、保育指針の５領域に基づいて、食事や排泄、着脱、清潔、安全、人間関係など11群に細分化し、さらに各群で７項目から10項目の設問で、計99項目を設定した。具体的には、食事の群では、「１．こぼさずに食べる」、「２．よく噛んで食べる」、「３．箸を正しく持つ」などである。

さらに、観点Ａ、観点Ｂ、観点Ｃの回答における３つの観点を設定し、１つの項目に対しそれぞれの観点から回答してもらった。３つの観点については、保育士の調査では、観点Ａは「小学校就学初期に身に付けさせたいと考える項目群内での順位」、観点Ｂは「小学校就学を見据えて保育しているか（４値）」、観点Ｃでは「現在の年長児童はできているか（４値）」

とした（図１）。なお、保育士の調査での観点Ｃについては、回答者は年長担当および主任保育士に限定した。対して、小学校教職員の調査では、観点Ａは「就学初期にできていた方が望ましいと思われる項目の順位」、観点Ｂは「就学初期にできていてほしいか（３値）」、観点Ｃは「現在の１年生はできているか（４値）」とした。

〈保育士〉
観点A: 小学校就学初期に身に付けさせたい項目の順位
観点B: 小学校就学を見据えて保育しているか
観点C: 現在の年長児童はできているか（年長担当保育士・主任保育士等のみ）

〈小学校教職員〉
観点A: 就学初期にできていた方が望ましいと思われる項目の順位
観点B: 就学初期にできていてほしいか
観点C: 現在の１年生はできているか

〈調査票の例〉

Ⅱ　児童の姿について

番号	《ⅰ食事》	A. 小学校就学まで身につけさせたい順位（10項目）	B. 小学校就学を見据えて意識して保育していますか				C. 現在（2月頃）の年長児童はできていますか			
			意識していない	あまり意識していない	まあまあ意識している	意識している	できていない	あまりできていない	まあまあできている	できている
1	こぼさずに食べる	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
2	よく噛んで食べる	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
3	箸を正しく持つ	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
4	食器を持って食べる	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
5	姿勢良く食べる	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
6	食べ物が口に入っている時はしゃべらない	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
7	主食、副食をバランス良く食べる	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
8	苦手な食べ物でも食べようとする	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
9	時間内に食事を終える	/10	①	②	③	④	①	②	③	④
10	食べ物に興味や関心を持つ	/10	①	②	③	④	①	②	③	④

図１　調査票の観点および調査票の例

ⅴ　分析方法

本稿では、本研究の趣旨に基づいて、回答者の基本属性に加え、上記調査における就学期の姿に関する項目の基本的生活習慣に相当する「食事（10項目）」と「排泄（10項目）」、「着脱（７項目）」、「清潔（10項目）」の４つの項目群37項目について、観点Ａおよび観点Ｃでの分析を行った。

分析方法として、基本属性については、回答者の傾向を把握するため、年齢および経験年数について記述統計量の算出を行った。

さらに、就学期の児童の姿に関し、観点Ａおよび観点Ｃについて保育士と小学校教職員の結果の比較を行った。比較の方法としては、観点Ａについては保育士と小学校教職員の各群内を得点化し、その後、保育士と小学校教職員の回答傾向の違いを確認するためにＴ検定を行った。得点化については、「食事」と「排泄」、「清潔」の群では項目数が10項目であるため、身に付けさせたい順位が１番目の項目を10点、２番目を９点とし、10番目を１点とした。「着脱」の群は７項目であるため身に付けさせたい順位が１番目となった項目を７点、以下、２番目を６点、７番目を１点とした。

観点Ｃでは、各項目について「現在の年長児（小学校教職員では、現在の１年生）はできているか」を「できていない」「あまりできていない」「まあまあできている」「できている」から選択してもらったため、「できていない」および「あまりできていない」を「できてい

ない群」、「まあまあできている」および「できている」を「できている群」の２群にしてクロス表による集計と保育士と小学校教職員の回答傾向の違いを確認するために x^2 検定を実施した。

ⅵ　倫理的配慮

本研究の倫理的配慮として、保育士および小学校教職員の調査票に調査同意書を添付し、個人情報の取り扱い方法、調査票の保管方法、得られたデータの使用方法についての記載をし、同意書において同意が得られた回答のみを回収し、集計および分析の対象とした。

Ⅲ　結　果

保育士および小学校教職員に対し、「就学期の児童に関する調査」を実施したところ、保育士からは880件、小学校教職員からは129件の回答が得られた。

ⅰ　回答者の基本属性について

分析対象となった保育士の平均年齢は39.01歳（SD=±12.45）、平均経験年数は13.30年（SD=±10.5）であった。小学校教職員の平均年齢は50.47歳（SD=±7.17）、平均経験年数は26.9年（SD=±9.97）となった。

保育者と小学校教職員の年齢および経験年数の差を確認するためにＴ検定を行ったところ、いずれも有意な差がみられた。

ⅱ　就学期の児童の姿に関する観点Ａの結果について

観点Ａでは、就学までに身に付けさせたい項目の順位について、「食事」、「排泄」、「着脱」、「清潔」の各項目群でそれぞれの順位を得点化し、各項目の平均値を算出した。その後、保育士と小学校教職員の回答傾向の違いを確認するためにＴ検定を行った。結果は以下に示す通りとなった（表１）。

「食事」については、保育士で最も得点平均が高かった項目は、7.07の「２．よく噛んで食べる」であり、次いで「４．食器を持って食べる」の6.88となった。一方、小学校の教職員では「８．苦手な食べ物でも食べようとする」が6.39で最も高く、次いで「４．食器を持って食べる」「１．こぼさずに食べる」が高かった。保育士と小学校教職員の項目間の平均値の比較では、10項目中「３．箸を正しく持つ」以外の９項目で有意な差が確認された。

「排泄」の群で、保育士が最も就学期に身につけさせたいと考える項目は「１．便意を感じたら自分でトイレに行く」の8.98で他の項目に比べ高くなった。小学校教職員でも同様の結果を示しており、「１．便意を感じたら自分でトイレに行く」が9.36と最も高かった（表２）。この項目についてはＴ検定でも有意な差が見られず、保育士、教職員ともに就学期において身に付けさせたい重要な項目であることが伺えた。なお、「１．便意を感じたら自分でトイレに行く」および「７．ズボンやスカートを脱がずに排泄する」「10．一定時間排尿せずに過ごす」以外の７項目で違いが確認された。

着脱については、７項目での比較であるため最大値は７となる。その上で、保育士で最も高い平均値を示した項目は、「３．衣服の前後や裏表が分かる」の4.91であった（表３）。小

表１　「食事」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	全体の平均値	平 均 値		*P Value*注
		保育士	教職員	
1．こぼさずに食べる	5.97	5.87	6.69	.01*
2．よく噛んで食べる	6.88	7.07	5.53	.00*
3．箸を正しく持つ	5.99	5.98	6.02	.88
4．食器を持って食べる	6.44	6.39	6.80	.34
5．姿勢良く食べる	6.09	6.20	5.35	.00*
6．食べ物が口に入っているときはしゃべらない	4.34	4.18	5.47	.00*
7．主食、副食をバランスよく食べる	3.94	4.13	2.67	.00*
8．苦手な食べ物でも食べようとする	5.81	5.65	6.85	.00*
9．時間内に食事を終える	3.79	3.55	5.47	.00*
10．食べ物に興味や関心を持つ	5.76	5.97	4.31	.00*

注：独立サンプルのＴ検定，$P^*<0.05$

表２　「排泄」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	全体の平均値	平 均 値		*P Value*注
		保育士	教職員	
1．尿意・便意を感じたら自分でトイレに行く	9.03	8.98	9.36	.16
2．トイレを汚さずに使う	5.36	5.23	6.26	.00*
3．和式便器・洋式便器の両方が使える	4.56	4.39	5.74	.00*
4．スリッパを上手に使う	3.93	4.04	3.16	.00*
5．スリッパを揃える	4.04	4.16	3.22	.00*
6．トイレットペーパーを適量で使う	4.52	4.64	3.64	.00*
7．ズボンやスカートを脱がずに排泄する	6.18	6.14	6.45	.19
8．排泄の後に水を流す	6.19	6.13	6.61	.01*
9．排泄の後に手を洗う	6.19	6.30	5.43	.00*
10．一定時間排尿せずに過ごす	5.03	4.96	5.44	.10

注：独立サンプルのＴ検定，$P^*<0.05$

学校教職員で最も高かった項目は「４．自分の服と他人の衣服の区別ができる」となった。保育士と小学校教職員の比較では、７項目中、「２．立ったまま靴の脱ぎ履きをする」以外の６項目で回答傾向の違いが確認された。

「清潔」の群では、「３．食事の前や排泄の後に手を洗う」が保育士、小学校教職員ともに最も高い平均値を示し、「４．手を洗った後に手を拭く」、「２．鼻水が出たことに気づき自分で拭く」の２項目についても平均値7.00以上の高い結果となった（表４）。

表３　「排泄」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	全体の平均値	平 均 値		P Value注
		保育士	教職員	
1．靴の左右を間違えずに履く	4.76	4.83	4.28	.00*
2．立ったまま靴の脱ぎ履きをする	2.95	2.96	2.84	.38
3．衣服の前後や裏表が分かる	4.95	4.91	5.26	.01*
4．自分の服と他人の衣服の区別ができる	5.00	4.85	6.01	.00*
5．ボタンやファスナー等の掛け外しができる	4.28	4.19	4.93	.00*
6．脱いだ衣服をたたむ	3.93	4.02	3.37	.00*
7．気温等に合わせて必要に応じて衣服の調節ができる	2.13	2.14	1.37	.00*

注：独立サンプルのＴ検定，$P^*<0.05$

表４　「清潔」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	全体の平均値	平 均 値		P Value注
		保育士	教職員	
1．咳やくしゃみをするときに手で覆う	5.76	5.75	5.84	.68
2．鼻水が出たことに気づき自分で拭く	7.23	7.23	7.24	.94
3．食事の前や排泄の後に手を洗う	8.65	8.62	8.81	.21
4．手を洗った後に手を拭く	7.29	7.30	7.26	.80
5．食事の後に口まわり等をきれいにする	5.64	5.73	5.05	.00*
6．食事の後に歯を磨く	3.76	3.72	4.04	.14
7．戸外からもどった時にうがいをする	4.75	4.86	3.95	.00*
8．自分で頭や体をきれいにする	2.87	2.78	3.52	.00*
9．服が汚れたら自ら着替える	4.04	4.12	3.54	.01*
10．身の回りの持ち物を整理する	5.03	4.89	6.03	.00*

注：独立サンプルのＴ検定，$P^*<0.05$

さらに、保育士と小学校教職員の比較においては、違いが確認された項目は「５．食事の後に口まわり等をきれいする」や「７．戸外からもどった時にうがいをする」など10項目中５項目であり、他の群に比べ、違いが見られる項目が少なかった。

ⅲ　就学期の児童の姿に関する観点Cの結果について

観点Ｃでは、「食事」、「排泄」、「着脱」、「清潔」の４群での各項目について、保育士からは「現在の年長児童はできているか」、小学校教職員からは「現在の１年生はできているか」の観点から回答してもらった。「できていない」から「できている」までの４値で回答してもらったが、回答傾向の差を確認するための x^2 検定を行う際に、期待度数が５未満のセルがあったため、「できていない」および「あまりできていない」を「できていない群」、さら

に「できている」および「まあまあできている」を「できている群」とし2値による集計・分析を行った。各項目の回答と分析の結果は以下に示す通りとなった。

「食事」の群について保育士の回答で「できている群」が最も多かったのは、「8．苦手な物でも食べようとする」であり148件（99.3%）であった（表5）。次いで、「1．こぼさずに食べる」や「10．食べ物に興味や関心を持つ」となり、10項目中4項目で「できている群」の回答が90%を超えた。一方、小学校教職員で「できている群」の回答が最も多かった項目は、「1．こぼさずに食べる」であり、93件（83.8%）が「できている群」に回答した。一方、小学校教職員で「できている群」が最も少なかったのは、「3．箸を正しく持つ」の45件（41.7%）であり、半数以上が「できていない群」での回答だった。さらに、x^2検定による回答傾向の違いについては、10項目すべての項目で有意な差が確認され、保育士と小学校教職員での児童に対する認識の違いが明らかとなった。

「排泄」の群については、「1．尿意・便意を感じたら自分でトイレに行く」を筆頭に、ほぼすべての項目で保育士は90%以上「できている群」に回答していた（表6）。一方、小学校教職員の回答で「できている群」が最も多かった項目は「1．尿意・便意を感じたら自分でトイレに行く」であり、99%が「できている群」に回答していた。他の項目についてもおよそ80%以上で「できている群」としており、保育士および小学校教職員ともに、高く「できている」との認識を示した。

表5　「食事」における保育士と小学校教職員の観点Cの結果の比較

項　　目	保育士と教職員の別	できていない群[注1]	できている群[注1]	*P Value*[注]
1．こぼさずに食べる	保育士	4(2.7)	145(97.3)	.00*
	教職員	18(16.2)	93(83.8)	
2．よく噛んで食べる	保育士	16(10.7)	133(89.3)	.01*
	教職員	24(21.6)	87(78.4)	
3．箸を正しく持つ	保育士	40(26.8)	109(73.2)	.00*
	教職員	63(58.3)	45(41.7)	
4．食器を持って食べる	保育士	19(12.8)	130(87.2)	.00*
	教職員	54(49.1)	56(50.9)	
5．姿勢良く食べる	保育士	32(21.5)	117(78.5)	.00*
	教職員	61(55.5)	49(44.5)	
6．食べ物が口に入っているときはしゃべらない	保育士	51(34.2)	98(65.8)	.02*
	教職員	53(48.2)	57(51.8)	
7．主食、副食をバランスよく食べる	保育士	42(28.2)	107(71.8)	.00*
	教職員	60(55.0)	49(45.0)	
8．苦手な食べ物でも食べようとする	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.00*
	教職員	38(34.5)	72(65.5)	
9．時間内に食事を終える	保育士	13(8.7)	136(91.3)	.00*
	教職員	71(64.5)	39(35.5)	
10．食べ物に興味や関心を持つ	保育士	11(7.4)	138(92.6)	.00*
	教職員	27(24.5)	83(75.5)	

注1　「できていない群」「できている群」のセルの値は度数、( ) 内は保育士・教職員内でのそれぞれの割合を示す
　2　Fisher の直接法、$P^*<0.05$

表６　「排泄」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	保育士と教職員の別	できていない群注1	できている群注1	*P Value*注
1．尿意・便意を感じたら自分でトイレに行く	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.68
	教職員	1(0.9)	111(99.1)	
2．トイレを汚さずに使う	保育士	3(2.0)	146(98.0)	.00*
	教職員	21(18.8)	91(81.3)	
3．和式便器・洋式便器の両方が使える	保育士	15(10.1)	134(89.9)	.25
	教職員	15(13.5)	96(86.5)	
4．スリッパを上手に使う	保育士	6(4.0)	143(96.0)	.00*
	教職員	19(17.4)	90(82.6)	
5．スリッパを揃える	保育士	16(10.7)	133(89.3)	.00*
	教職員	46(42.2)	63(82.8)	
6．トイレットペーパーを適量で使う	保育士	6(4.0)	143(96.0)	.00*
	教職員	22(19.6)	90(80.4)	
7．ズボンやスカートを脱がずに排泄する	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.21
	教職員	3(2.7)	109(97.3)	
8．排泄の後に水を流す	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.11
	教職員	4(3.6)	108(96.4)	
9．排泄の後に手を洗う	保育士	5(3.4)	144(96.6)	.14
	教職員	8(7.1)	104(92.9)	
10．一定時間排尿せずに過ごす	保育士	5(3.4)	144(96.6)	.01*
	教職員	14(12.5)	98(87.5)	

注１「できていない群」「できている群」のセルの値は度数、( ) 内は保育士・教職員内でのそれぞれの割合を示す
　２　Fisher の直接法、$P^*<0.05$

保育士と小学校教職員の回答傾向の違いについては、「２．トイレを汚さず使う」や「４．スリッパを上手に使う」など、10項目中５項目で認識の違いが確認された。

「着脱」の群では、「１．靴の左右を間違えずに履く」や「３．衣服の前後や裏表が分かる」、「４．自分の服と他人の衣服の区別ができる」で保育士はすべての回答者が「できている群」に回答し、他の項目でも高い割合で「できている群」に回答した（表７）。小学校教職員でも「４．自分の服と他人の衣服の区別ができる」や「１．靴の左右を間違えずに履く」など保育士が高く「できている」と認識していた項目において同様に高く「できている」と評価していた。しかし、「２．立ったまま靴の脱ぎ履きをする」や「７．気温等に合わせて必要に応じて衣服の調節ができる」では「できている群」が70％を下回った。

保育士と小学校教職員での認識の差については、７項目中６項目で有意な差が確認され、いずれの項目においても保育士の方が「できている群」が多い傾向であった。

「清潔」の群では、「４．手を洗った後に、手を拭く」の148件（99.3％）を筆頭に、保育士はすべての項目で「できている群」が80％以上という結果となった（表８）。一方、小学校教職員で「できている群」が多かった項目は「３．食事の前や排泄の後に手を洗う」の102件（94.4％）と90％以上を示したが、「７．戸外からもどった時にうがいをする」や「１．咳やくしゃみをするときに手で覆う」は「できていない群」が50％以上を示すなど、保育士と小学校教職員との認識に大きな違いが見られた。実際に、x^2検定の結果においても、「清

表７　「着脱」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	保育士と教職員の別	できていない群[注1]	できている群[注1]	*P Value*[注]
1．靴の左右を間違えずに履く	保育士	0(0.0)	149(100.0)	.03*
	教職員	4(3.6)	107(96.4)	
2．立ったまま靴の脱ぎ履きをする	保育士	20(13.4)	129(86.6)	.00*
	教職員	36(32.4)	75(67.6)	
3．衣服の前後や裏表が分かる	保育士	0(0.0)	149(100.0)	.01*
	教職員	5(4.5)	106(95.5)	
4．自分の服と他人の衣服の区別ができる	保育士	0(0.0)	149(100.0)	.08
	教職員	3(2.7)	108(97.3)	
5．ボタンやファスナー等の掛け外しができる	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.00*
	教職員	10(9.0)	101(91.0)	
6．脱いだ衣服をたたむ	保育士	3(2.0)	146(98.0)	.00*
	教職員	32(29.1)	78(70.9)	
7．気温等に合わせて必要に応じて衣服の調節ができる	保育士	7(4.7)	142(95.3)	.00*
	教職員	35(31.5)	76(68.5)	

注１「できていない群」「できている群」のセルの値は度数、( ) 内は保育士・教職員内でのそれぞれの割合を示す
　２　Fisher の直接法、$P^*<0.05$

表８　「清潔」における保育士と小学校教職員の観点Ａの結果の比較

項　　目	保育士と教職員の別	できていない群[注1]	できている群[注1]	*P Value*[注]
1．咳やくしゃみをするときに手で覆う	保育士	29(19.5)	120(80.5)	.00*
	教職員	54(50.0)	54(50.0)	
2．鼻水が出たことに気づき、自分で拭く	保育士	5(3.4)	144(96.6)	.00*
	教職員	18(16.7)	90(83.3)	
3．食事の前や排せつの後に手を洗う	保育士	2(1.3)	147(98.7)	.06
	教職員	6(5.6)	102(94.4)	
4．手を洗った後に、手を拭く	保育士	1(0.7)	148(99.3)	.00*
	教職員	21(19.4)	87(80.6)	
5．食事の後に、口まわり等をきれいにする	保育士	11(7.4)	138(92.6)	.00*
	教職員	34(31.5)	74(68.5)	
6．食事の後に歯を磨く	保育士	16(10.7)	133(89.3)	.02*
	教職員	21(21.2)	78(78.8)	
7．戸外からもどった時にうがいをする	保育士	11(7.4)	138(92.6)	.00*
	教職員	64(59.3)	44(40.7)	
8．自分で頭や体をきれいに拭く	保育士	11(7.4)	138(92.6)	.00*
	教職員	44(44.0)	56(56.0)	
9．服が汚れたら自ら着替える	保育士	9(6.0)	140(94.0)	.00*
	教職員	39(36.8)	67(63.2)	
10．身の回りの持ち物を整理する	保育士	24(16.1)	125(83.9)	.00*
	教職員	41(38.0)	67(62.0)	

注１「できていない群」「できている群」のセルの値は度数、( ) 内は保育士・教職員内でのそれぞれの割合を示す
　２　Fisher の直接法、$P^*<0.05$

潔」の10項目中、「３．食事の前や排泄の後に手を洗う」を除く９項目で有意な差が確認された。

Ⅳ　考　察

ⅰ　保育士と小学校教職員の認識の違いについて

本研究では、保育所保育指針の５領域の「健康」に相当する部分として、児童の基本的生活習慣に視点をあて、「食事」と「排泄」、「着脱」、「清潔」の４群についてのみの分析であるが、結果からも見てとれるように、観点Ａの就学期の児童に対して必要と考える行動の優先順位や、観点Ｃの現時点での児童ができているか否かについて保育士と小学校教職員の認識に大きな乖離があることが示唆された。観点Ａについては、保育士は児童を小学校へ送りだす視点で、小学校教職員は保育所から児童を受け取る側の視点と考えると、それぞれの生活の場の特徴が異なるため、ある程度の認識の相違は予測される範囲と考えられる。とはいえ、観点Ａは換言すれば、保育士は児童に対する保育の中で重要と考える視点であり、小学校教職員は就学期の児童の行動に対するニーズといえる。そこに双方で意識の相違があることは、結果として、互いに対する不満や不信へと発展しかねない要素とも考えられる。就学前後の保育所保育や小学校教育において、さらには保育所から小学校へと生活の場が移行し大きく環境が変化する中で、小学校就学を挟んだ時期に保育士と小学校教職員の双方で互いの意識を共有化していくことは保小連携の優先されるべき第一歩であるといえる。

観点Ｃの結果についても観点Ａの結果と同様に、多くの項目で保育士と小学校教職員の間で回答傾向に違いが確認された。本調査では、保育士の調査は児童が保育所生活をしている際に実施され、小学校教職員の調査は児童が小学校生活を送っている時に実施されているため、児童が生活している集団特性は異なるものの、同一の年代の児童を対象にしているため年代や世代による際は存在しない。このことを踏まえると、観点Ｃの結果は、１つの児童の行動に対して保育士と小学校教職員で「できている」と感じたり、「できていない」と感じたりしていることになる。本分析結果では全体的に保育士の方が「できている」傾向が高く、小学校教職員は保育士が認識しているほど「できている」とは考えていないという傾向が見られた。これは、保育士が児童の行動や様子に目標を立て、そこに向かって保育し、達成できたと感じていても、小学校教職員から見るとまだまだ不十分であると認識していることを意味する。児童の状態像を共有化するためにはいくつかの方法が考えられる。保育士と小学校教職員が互いの文化も含めてそれぞれの領域の実態や現状などを理解することも重要である。また、児童の行動や状態像に関しては、より具体的な尺度を開発し、だれでも同じように評価できるようにすることも一つの手段であると考えられる。いずれにしても、観点Ａと同様に、一人ひとりの児童に関わっている保育士と小学校教職員の双方の意識や理解の擦り合わせが必要であることが示唆された。

ⅱ　本研究の特徴と限界

本調査はＳ市に所在する57ヶ園の保育所すべてで実施されたことである。小学校においても50校すべての小学校に調査票を配布し、回答が43校と多くの小学校から回答を得られている。保小連携に関連した本調査規模での実施例はなく、貴重な情報となりうると考えられる。

加えて、１つの児童の姿について、保育士と小学校教職員の双方が３つの観点で回答を行い、その結果を比較できるようにしていることが本調査における大きな特徴の１つといえる。さらに、特に観点Ｃでは、保育士と小学校教職員の調査が就学期を挟んで実施されたため、同一年代の児童に対して回答するようにデザインされていることも大きな特徴である。今までの先行研究において、詳細な児童の姿に関して保育士等の保育者と小学校教職員の認識が比較されるようにデザインされた研究は行われていない。これらを踏まえて、児童の接続期に関わる保育士と小学校教職員の意識を明示したことは、今後の保小連携を見据えた際に有益な情報となることが期待された。

本研究の限界として、第一には調査対象が１つの市であるため必ずしも全国の実態を反映しているとは言えない可能性を有する。保育所数や小学校数には全国さまざまであり、また地域特性もあると推測される。したがって、本結果を大都市部や人口の少ない地域に当てはめて検討する際には注意を要する。しかし、本調査が実施されたＳ市は中核市であり、調査もほぼ全数調査として実施されたため、多くの市町村にとっても適応できる情報であると考えられる。

限界の第二としては、保育士の調査は保育園に入所している児童が対象であるが、小学校教職員の調査では保育所から就学してきた児童に加え、幼稚園や家庭など、就学前の環境が異なる児童も含まれていることである。この点は、特に観点Ｃの児童の現在の姿に対する認識の差異が現れた大きな要因になりかねない。しかし、現在の保育指針は、幼稚園で用いられる幼稚園教育要領との整合性が図られており、特に３歳以上児の教育的機能に関してはその傾向はより顕著である。本調査項目は保育指針を軸に設計・設定されているため、就学期の児童の姿に関してはほぼ共有されていると推察される。

第三の限界として、本稿では児童の基本的生活習慣に焦点をあてたため、保育指針の「健康」に相当する部分、本調査では「食事」や「排泄」、「着脱」、「清潔」の４つの側面からの検討であった。日常生活の基礎はこれらの基本的生活習慣が重要であることに異論はないが、保育指針では「健康」以外の領域も存在し、小学校での生活や学びにとっても重要な要素が数多く存在する。これら本研究で扱った以外の側面に関しても分析を進めていく必要があり、今後の課題とする。

Ⅴ　おわりに

本研究では、今後の保小連携のあり方を模索していくにあたり、連携の基礎ともなりうる保育士と小学校教職員による就学期児童の基本的生活習慣に対する意識や認識の差異を検討した。

その結果、第一に、就学期において身に付けさせたい、あるいは身につけてほしいと考える児童の行動や状態の優先順位が異なることが明らかとなった。また、就学期前後の児童の状態像に対する認識も保育士と小学校教職員で大きな乖離が存在することが示唆された。これらの差異は、今後、保育所と小学校がより効果的に連携を進めていくにあたって大きな障壁となることが推察され、連携を行っていくためのさまざまな取組みを進めていく一方で、就学期前後の児童に対する保育や教育の共通理解や共有、さらには意識・認識の差異を埋めていく手段を検討していくことが大切であると考えられた。

なお、本稿はＳ市保育連盟で実施された「就学期の児童の姿に関する調査」によって得られたデータを用い、更に詳細な分析として実施したものである。調査データを提供していただいたＳ市保育連盟および調査に協力していただいたＳ市に所在する保育所職員ならびに小学校教職員の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

1）厚生労働省　保育所保育指針　2008
2）原子純　子どもの豊かな育ちと就学前教育 ── 小学校教育との連続性を視点として ──　共栄学園短期大学研究紀要27　p.145-165　2011
3）腰山豊　幼・小の接続連携に関する一考察 ── 教育の内容及び方法から ──　聖園学園短期大学研究紀要38　p.11-24　2008
4）山田秀江　幼保小接続カリキュラムについての一考察 ── 5歳児後半期に育てたい力と保育内容 ── 四條畷学園短期大学紀要46　p.29-35　2013
5）秋田喜代美・第一日野グループ編著　保幼小連携－育ちあうコミュニティづくりの挑戦　p.58-81　2013
6）田中浩二・大塚良一・福山多江子　保育所保育児童要録に関する小学校教職員の意識について－保育所児童保育要録に関する小学校へのアンケート調査から　東京成徳短期大学紀要47　p.27-35　2014